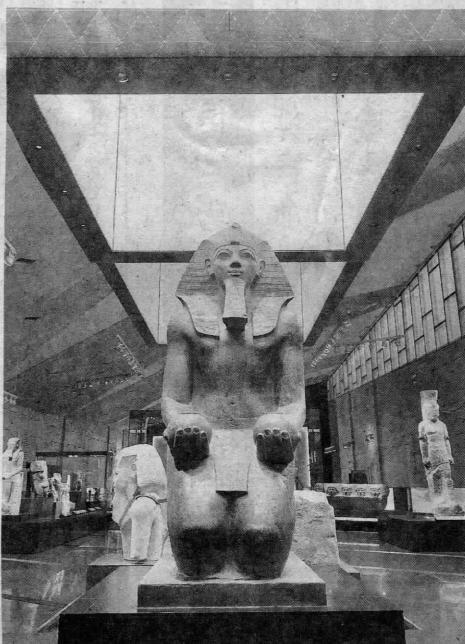


2025年(令和7年)

11月8日 土曜日



大エジプト博物館のメインギャラリー©GEM



# 10万点収蔵の「大エジプト博物館」

大エジプト博物館の会場で9月、「ついにオープン！」大エジプト博物館のとおきの話」と題したトークイベントを開催。国際協力機構(JICA)が開館準備の苦労や今後の期待を語った。

同館はクフ王のピラミッドの近くに建設された。JICAは建設や宝物の保存修復などを長期にわたって支援した。展示面積は約5万平方メートルで、単一文明を扱う博物館では世界最大級という。老朽化するエジプト考古学博物館にあったツタンカーメン王(約3350年前に死去)の墓の副葬品約5000点もGEMで収蔵、公開している。

## 専門家が明かす苦労

保存修復の専門家である東京芸術大の岡田靖准教授は、ツタンカーメン王の副葬品のうち戦闘用の2頭立て二輪馬車「チャリオット」5台と儀礼用のベッド3台の修復に関わった。普段修復する日本の仏像は古くても約1400年前の飛鳥時代のものといい、「ここまで古いものには触つたことがなかった。ドキドキしたが、チャリオットもベッドもまだ強度が残っていた」と話した。

イベントに登壇した日本通運関西美術品支店の徳田英昌さんは、美術品移送一筋44年のベテラン。現地でも宝物に触れる部分は紙や布など有機物で包み、ミリ単位の作業を遂行したと説明した。「エジプト側は10%ぐらいは壊れても仕方がないと考えていたようだが、壊れるものはゼロでなければ負けだと思って運んだ」と自負を語った。

GEMの元第一館長補の鈴木彰さんは「入った瞬間から日本にはない雰囲気に圧倒される。見学するには何日もかかるが、ピラミッドの近くにすばらしい博物館ができたので、ぜひ訪ねてほしい」と呼び掛けていた。



大エジプト博物館(手前)と  
ギザのピラミッド群©GEM